

Vol.31



# 2人の視線 悲願の日本一

日本文理大 女子ソフトボール部



今村みなみ 多彩な変化球が持ち味



強肩の坂本彩音 チームのムードメーカー

投手の今村みなみ（左）と捕手の坂本彩音。今村は模範的な言動が他選手の尊敬を集め、坂本は独特な雰囲気チームにアクセントを与えている＝大分市一木のNBUグラウンド

日本文理大(大分市)は10日から「全国大学選抜男女ソフトボール選手権大会」に挑む。九州を代表する女子ソフトボールの強豪。投手の今村みなみ(21)と捕手の坂本彩音(22)の4年生バッテリーは同じ社会人チームに内定。悲願の大学日本一に向け、最後の追い込みに余念がない。同大会はコロナ禍に伴う、文

部科学大臣杯全日本大学男女ソフトボール選手権大会(インカレ)の代替大会。全国各地の代表16チームが出場する。2004年の創部後、インカレの最高順位は16年の3位。悲願達成を目指す部員の士気は高い。今村は安定感とライズボール、スライダー、チェンジアップなど多彩な変化球が持ち味。

坂本は強肩で明るいキャラクター。チームのムードメーカーでもある。「投手に寄り添ってほしい」と今村の信頼も厚い。大学最後の全国の舞台。初戦の金沢学院大(石川県)に勝ち、勢いに乗りたところだ。今村は「去年全国を戦ったメンバーがほぼ残っている。経験を生かしたい」。坂本は「練習の厳し

さに耐えることで、大会本番を本当の意味で楽しめるようにしたい」。2人の見据える先は、頂点しかない。



2面に続く

## 1年から紡いだ強い絆 ■ 社会人になっても「また一緒に」

### 日本文理大 女子ソフトボール部・今村みなみ、坂本彩音



1面から続く

今村みなみ(21)は佐賀県神埼市出身で、ソフトボールは中学から始めた。「九州の強い大学に行きたい」と日本文理大に進んだ。監督の長沢佳子(40)によると2月に指を負傷したが、すぐに手術し、併せて他の気になっていた場所も治した結果、球速が増した。安定感と変化球に加え、新たな武器を手にした。

坂本彩音(22)は福岡県大野城市出身。小学1年から始め、中学時代に指導を受けた長沢を慕って同大へ。厳しいチーム内の競争を経て成長し、ブルペンのまとめ役としてバッテリーリー

ダーを任せられた。1年からたびたびバッテリーを組んできた今村も「自分の練習を後回しにしても投球練習に付き合ってくれる」と全幅の信頼を寄せる。

今村と坂本が来年から所属するのは日本女子ソフトボールリーグ2部、NECプラットフォームズ(静岡県掛川市)。同大によるとリーグには多くの選手を送り出しているが、同一チームにバッテリーで同じ年に入団するのは初めて。国内のトップリーグである1部昇格と定着への期待を背負うことになる。

好投手として複数の社会人チームから声が掛かっていたという今村。「就職して仕事に集中したい」という思いもあり、当初は現役続行に迷いがあった。そんな折、坂本が「社会人になってもソフトボールを続けたい」と熱望。セレクションで入



今村(左)は姉、坂本は兄の影響でソフトボールを始めた

団を勝ち取った。「また一緒にやれるなら」。坂本の思いと行動が、今村の背中を押した。

来年からは1部昇格を目指す戦い。「もっとスピードがいる。変化球もまだ足りない」(今村)。

「打者のレベルが上がってくる。違う配球も覚え、打撃力も上げていかないと」(坂本)。新たなフィールドに、再び2人で。努力の日々は大学ソフトボールが終わっても続いていく。